
『アンゲルスの良心問題大全』について

雪 嶋 宏 一

1. はじめに

2010年度の早稲田大学図書館収集資料の一つに1495年ヴェネツィアで刊行されたアンゲルス・デ・クラワシオ (Angelus de Clavasio、イタリア語名アンジェロ・カルレッティ Carletti, Angelo, ca.1410-1495) の『アンゲルスの良心問題大全 (*Summa angelica de casibus conscientiae*)』がある。本書は早稲田大学図書館に収蔵された19番目のインキュナブラ (15世紀西洋活版印刷本) でもあることから⁽¹⁾、本書の解題と本書の16世紀への影響について述べてみたい。

2. 解題

2. 1. 書誌記述

アンゲルス・デ・クラワシオ、『アンゲルスの良心問題大全』(以下『アンゲルスの大全』と略)、ヴェネツィア：ジョルジョ・アッリヴァーネ、1495年5月2日印行、八折判。

Angelus de Clavasio. *Summa angelica de casibus conscientiae*. Venice: Georgius Arrivabenus, 2 May 1495. 8vo.

Title, 1 ($\pi 1$)^r: Summa Angelica.

Colophon, 527 (X7)^{rb}, line 18: ¶Explicit su<m>ma a<n>gelica de

casib<us> co<n> | sci<entia>e p<er> fratre<m> Angelu<m> de claua-
sio c<on>pil- | lata: maxi<m>a cu<m> dilige<n>tia reuisa: e<t> fid<e>li
studio eme<n>data sicut ipsu<m> op<us> p<er> se sa | tis
attestabit<ur>. Venetijs i<m>pressa p<er> Geor | giu<m> de ariuabenis.
mantuanu<m>: Anno | d<omi>ni .M.CCCC. nonagesimo. q<ui>nto | die
vero secundo mai.

8vo in 12s, π^8 , a⁸ b-z A-V¹² X⁸, χ^{12} [\$6 (-I6, N4, χ^{1-6}) signed; misprinting V5
as 'V'], 540 leaves, ff. [8] 1-412 415 416 413 414 417-519, [1-12] [misprinting
43 as '4.', 95 as '59', 268 as '168', 356 as '353', 397 as '398', 413-416 as '415
416 413 414', 417 as '427', 440 as '44', 486 as '48', 488 as '481', and 509 as
'506'].

Text in 2 cols., 44 lines with headline and direction-line with marginalia,
128 (135) x 86 (94) mm, printer's measure 42 mm (a3^r), 58G and 116G.

Contents: $\pi 1^r$, label title; $\pi 1^v$, Epistola. F. Hieronimi tornieli lectoris. Ad. R.
p. F. Angeli de clauasio p<raese>ntis | operis auctore<m>; $\pi 2^v$, ¶Respon-
sio Venera<n>di patris fr<atr>is Angeli ad fratre<m> Hieronimu<m>
sup<er>scriptu<m>; $\pi 3^r$, Explicit p<ro>logus Incipit tabula declaratoria
ordi<ni>s. e<t> co<n>te<n>toru<m> i<n> p<rae>dicta su<m>ma.; $\pi 3^v$,
table in 3 cols.; $\pi 6^v$, table in 2 cols.; $\pi 8^v$, blank; a1, text; X7^r, Ad lectorm.,
and colophon; X7^v, printer's mark (109 x 52 mm); X8, blank; $\chi 1^r$,
R<ubr>ice iuris e<t> canonici. in 2 cols.

Ref.: ISTC ia0076000; GW 1939; Bodleian incunabula catalogue (Bod-inc)
A-292.

Copy: Waseda University Library [F195-260], 170 x 112 mm., bound in
contemporary brown calf with a pair of metal clasps. Quire χ bound after
 π (cf.: Bod-inc A-292). Provenance: Georg Zuncher 1894 (MS on front past-
edown); 'Presented to J. F. Schoelldorpf Sept. 30, 1927' (MS on $\pi 1^r$).

2. 2. 著者について

著書アンゲルス・デ・クラワシオはイタリア北西部のキヴァッソ（Chivasso, ラテン語名 Clavasio）で1410年頃生まれ、地元で教育を受け、その後おそらく大学で神学と教会法・市民法を学び、地元に戻って司法官を務めた。この学識と経験は彼の後の人生に大きな意味をもった。1441年、彼は法職を辞してフランチェスコ会に入会して修道僧となった。リグーリア、ピエモンテなどの北イタリア各地の修道院で修行を積んで修練士となり、1462年にはジェノヴァの管区長に任命された。やがて、ピエトロ・ダ・ナポリ（Pietro da Napoli）に同行してオーストリアに派遣され、ドイツ、ポーランド、ボヘミア地域の内紛を納めることに成功し、1472年には司教総代理に選出された。

その後、イタリアの踵の先端の都市オトラントが1480年8月にオスマン・トルコのゲディク・アフメト・パシャ（Gedik Ahmet Paşa, d. 1482）率いるトルコ軍によって攻囲され占領される事件があり、オトラントの戦いが勃発した。アンゲルスはこの戦いの際1480年12月に教皇シクストゥス4世（Sixtus IV, 在位1471-84）の使節・代表に任命された。対トルコ戦争の十字軍を召集していた教皇はナポリ王フェルディナンド1世（Ferdinando I, 在位1458-94）の王子アルフォソ（Alfonso II, 在位1494-95）を派遣し、ハンガリー王マーチャーシュ1世（Mátyás I, ラテン語名 Matthias Corvinus, 在位1458-90）の援軍も得てトルコ軍に対戦した。教皇はアンゲルスに贖宥状の発行や姻族や血族関係の解決あるいは免罪などの幅広い司法上の権限を与え問題の解決を図り、アンゲルスも領主や人民を対トルコ戦争に参加するよう呼びかけ説得して軍隊に入隊させ、軍事力の維持に努めた。アンゲルスの貢献もあって翌年9月にオトラント奪還に成功した。

その後もサヴォイアやピエモンテで異端を唱えるワルド派の根絶に際してアンゲルスは教皇インノケンティウス8世（Innocentius VIII, 在位1484-92）から幅広い司法上の権限を与えられて派遣され、現地の教会の権限とは独立して法的な決定・判決を下した。ところが、1493年に司教総

代理期間が終わり、クーネオの修道院で余生を過ごした後1495年4月に亡くなった。彼はその功績によって約250年後の1753年に福者に聖別された⁽²⁾。

アンゲルスは生涯に8点の著作を残している。彼が存命中に公刊された著作は1481年頃にフィレンツェでニコラウス・ラウレンティイ (Nicolaus Laurentii) によって印刷された『シクストゥス4世の贖宥大勅書の宣言 (*Declaratio bullarum indulgentiarum Sixti IV*)』(IST ia00712900) と1486年に初版が刊行された『アンゲルスの大全』の2点のみである。その他の著作は、道徳神学の問題を論じた『モーセ十戒の十の教訓と主なる七人の生涯について (*Manuscriptum ... in quo agit de decem praeceptis Decalogi et de septem vitiis capitalibus*)』、フランチェスコ会が創設した抵当銀行 (Monte di Pietà) について述べた『逸話 (*Anecdota ... in quo agit de contractibus*)』、『論集 (*Tractatio de restitutionibus*)』の3点が18世紀になって刊行され、残りの3点、すなわち『聖グリエルモ・ディ・フェッラーラの顕示に関する布告 (*Statuta pro Clarissis di S. Guglielmo di Ferrara*)』、『フィレンツェのモンスの財産についての助言 (*Consilium de pecuniis Montis Florentiae*)』、『牛飼いの忠告 (*Consilium de bubulcis*)』は20世紀になってやっと印刷されて知られるようになった⁽³⁾。なお、『シクストゥス4世の贖宥大勅書の宣言』はわずか2葉の宣言文であり、フィレンツェ国立中央図書館に1部のみ保存されるユニーク・コピーであるが、『アンゲルスの大全』は15世紀だけでも26版が印行されて大いに利用された書物であったことから、これが彼の主著といえよう。

2.3. 『アンゲルスの大全』について

本書は中世から盛んに用いられた聴罪司祭用のマニュアルの一つである。同名の『良心問題大全 (*Summa de casibus conscientiae*)』という書物は14世紀イタリアの教会法学者アステサヌス・デ・アスト (Astesanus de Ast, イタリア語名 Astesano da Asti, d. ca.1330) や神学者のピーサのバルトロマエウス (Bartholomaeus de Sancto Concordio, イタリア語名 Bar-

tolomeo da San Concordino,あるいはBartolomeo Pisano, ca.1260-1349)が執筆しており、それぞれ『アステサヌスの大全 (*Summa Astesana*)』⁽⁴⁾、『ピーサの大全 (*Summa Pisanelle*)』と呼ばれていた⁽⁵⁾。そのため、アンゲルスは本書に自分の名前を冠して『アンゲルスの大全 (*Summa Angelica*)』としたのであろう。

内容は本書の序文で説明されているように、『ピーサの大全』を基に補遺を挿入し、許される場合には別な言葉にしたり別な順序にしたりしたものである⁽⁶⁾。ところで、15世紀のニコラウス・デ・アウスモ (Nicolaus de Ausmo, イタリア語名 Niccolò da Osimo, d. after 1453) は『アステサヌスの大全』および『ピーサの大全』の補遺 (*Supplementum Summae Pisanelle et Canones poenitentiales fratris Astensis*) を著している。ISTCによれば『アンゲルスの大全』は15世紀だけでも26版が刊行された。『アステサヌスの大全』の11版、『ピーサの大全』の8版、ニコラウス・デ・アウスモの補遺の21版と比較すれば、本書はより一層盛んに用いられたことは明らかであろう。

『アンゲルスの大全』の初版は1486年5月13日にアンゲルスの故郷キヴァッソでヤコビヌス・スイグス (Jacobinus Suigus) によって上梓された (ISTC ia00713000)。ちなみに、この初版はキヴァッソで15世紀に印刷された唯一の印刷本である。初版印刷の際にヒエロニムス・トルニエリ (Hieronymus Torniel, イタリア語名 Girolamo Torniello) による本書を印刷して広めるよう許可する書簡 (epistola) が巻頭に掲載された。著者はそれに応えて本書をヤコビヌス・スイグスに印刷させたことを告げ、自ら出版に関与したことを明らかにしている。序文に続いて神学の語彙索引と法学者の人名一覧、教会法と市民法の略語説明が掲載されている。本文では語彙がアルファベット順に配列され、それぞれの語彙の説明は法律の条文毎に段落を区切って行われている。そして、コロフォンの前にはヤコビヌス・スイグスによって詩作された読者に向けた (Ad lectorum) 6対の二行連句12行が挿入されている。そして巻末には教会法・市民法の題目索

引 (Rubrice iuris ciuilis et canonici) が付されており、本書の特徴となっている。このような本書の構成が後の版にも踏襲されている。

印刷者のヤコビヌス・スイグスは故郷であるトリノ北東のサン・ジェルマーノで1484年にシトー会の『聖務日課 (*Breviarium Cisterciense*)』 (ISTC ib01134500) を印刷したことが知られ、翌年には近隣のヴェルチェッリでニコラウス・デ・アウスモの『バルトロマエウスの大全の補遺』 (ISTC in00077000) を印行した。そして、3番目がキヴァッソでの『アンゲルスの大全』初版であった⁽⁷⁾。したがって、『バルトロマエウスの大全』に基づいて編纂された本書にはこの『バルトロマエウスの大全の補遺』が参照されたとみなされ、ヤコビヌス・スイグスが本書の編纂に大きな役割を果たしたと判断できよう。その後、彼はトリノを中心に印刷活動を行いながら、ヴェネツィアにも出向き、また世紀末にはリヨンに移転した。ISTC には彼にかかわる印刷物が54版ほど登録されている。しかし、彼は『アンゲルスの大全』を自ら再版することはなかった。

2. 4. 所蔵本『アンゲルスの大全』について

上述のように『アンゲルスの大全』は15世紀中に26版も印行され大いに用いられた。早稲田大学図書館所蔵本はその17番目の版であり、ヴェネツィアの印刷業者ジョルジョ・アッリヴァーネ (Giogio Arrivabene, ラテン語名 Georgius Arrivabenus) が印刷した『アンゲルスの大全』の4番目の版でもある。所蔵本は初版と同じ構成であるが、巻末の法学の項目索引が本文の前、教会法と市民法の略語説明の後に挿入されて製本されている。同じような製本状態はオックスフォード大学ボドリー図書館所蔵本にも見られることから (Bod-inc A-292)、決して特異なものではなからう。早稲田大学図書館所蔵本の製本は15世紀頃の子牛革装丁で1対の金属製の留め金が残されていることから、当時からこのような製本の順序で本書が利用されていたことが判明する。

ところで、所蔵本を詳細に観察すると葉番号 (foliation) には相当多数

の誤植がみられるが、従来のインキュナブラの書誌にはその点の記述がない。また、折丁 M では M2 と M4 の順序が逆転して乱丁となっている。この原因はこの折丁の折り方の間違いによって説明が可能である。本書の本文部分は 1 折丁が 12 葉で構成されている。折丁は全紙（シート、8 葉分）と全紙半切（ハーフシート、4 葉分）を組み合わせで構成されている。全紙には 1 - 4 葉と 9 - 12 葉分が組み付けられ、全紙半切に 5 - 8 葉分が組み付けられて丁合いの際に両者を組み合わせで一つの折丁を作った。本来八折判全紙の折（folding）はまずはシートの長辺を半折するのであるが、所蔵本ではこの折丁についてはどうも短辺を最初に半折してしまったようである。そのために M1 に続いて M4 となり、そして M3、M2 の順番になっている。したがって、折丁の後半部分も M11、M10、M9、M12 という順番になっているはずであるが、この部分にはもともと折記号は印刷されておらず、さらに葉番号に誤植があるため乱丁が

折丁 M の Outer sheet

407 3r	10v	415 (413) 9r	4v
2v	413 (415) 11r	12v	405 1r

折丁 M の Inner sheet

408 4r	9v	416 (414) 10r	3v
1v	414 (416) 12r	11v	406 2r

折丁 M の Outer half-sheet

411 7r	6v
8v	409 5r

折丁 M の Inner half-sheet

410 6r	7v
5v	412 8r

図 1. 折丁 M の構成

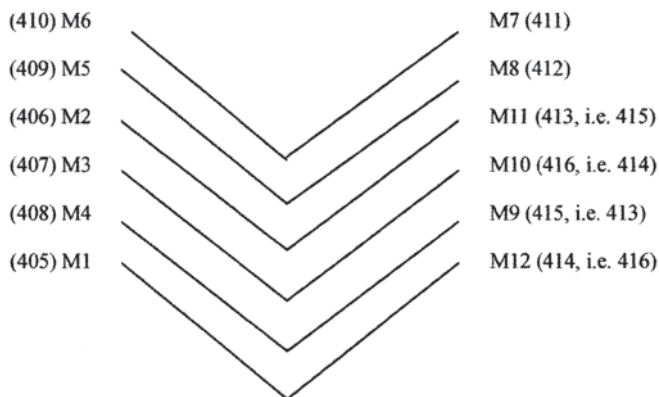


図2. 所蔵本の折丁 M の状態

複雑に見えたのである。折丁 M の構成を図示してみれば乱丁の原因が明らかになろう（図1～2参照）。これによって葉番号の誤植の理由もはっきりする。つまり、9r と 11r、10r と 12r で葉番号を取り違えて植字したために、このような葉番号の混乱が生じたことが明らかであろう。

アッリヴァーネは『アンゲルスの大全』の最初の版（1487年10月22日印行）を八折判8葉構成で印行している（GW 1924）。2番目の版（1489年10月9日印行）は四折判8葉構成とした（GW 1928）。3番目の版（1492年6月4日印行）は四折判であるが12葉構成に変えている（GW 1934）。そして、4番目の版（所蔵本と同版）については八折判12葉構成としたのである。一見して3番目の版を小型化して4番目の版を作成したように見えるが、実際の折丁の作り方は異なるものであった。このようにアッリヴァーネは版毎に判型と折丁構成を変えているが、その理由は明らかでない。八折判12葉構成はすでにヴェネツィアのニコラウス・デ・フランクフォルディア（Nicolaus de Frankfordia）が1487年10月30日に印行しているが（GW 1925）、この場合それと関係づける必要はなからう。

所蔵本を印刷したジョルジョ・アッリヴァーネについて言及しておこう。彼はマントーヴァ出身で1483年までにヴェネツィアに印刷所を開設し、

当初はパガニーノ・デイ・パガニーニ (Paganino dei Paganini, ラテン名 Paganinus de Paganinis) と共同で印刷所を経営したが⁽⁸⁾、1488年以降は単独で印刷を行い1517年頃まで活動して1520年に亡くなっている。教義書、神学書、法学書の印刷を得意としていた。15世紀中に60版以上、16世紀には43版を刊行した。初期の共同経営者であったバンガニーノはわが国ではルカ・パチョーリ (Pacioli, Luca, ラテン語名 Lucas de Burgo S. Sepulchri, d. 1517) 『算術、幾何学、比例、比率大全 (*Somma di arithmetica, geometria, proporzioni e proporzionalità*)』の印刷者として知られているが、彼もアッリヴァーベネと同様な分野の書物の印刷を行った。『アンゲルスの大全』も一度手掛けている (1499年6月7日印行、ISTC ia00729000)。八折判16葉構成であった (GW 1945)。アッリヴァーベネの印刷所は彼の兄弟と思われるチェザーレ・アッリヴァーベネ (Arrivabene, Cesare) に引き継がれ1528年まで継続され、その後1534年からジョルジョの息子アンドレア (Arrivabene, Andrea) によって再開され1570年までに約200版を刊行する中堅の印刷所として活動し、さらに彼の息子コルネリオ (Arrivabene, Cornelio) によって1598年まで経営された⁽⁹⁾。

2. 5. 『アンゲルスの大全』の諸版について

15-16世紀における『アンゲルスの大全』の刊行の経緯を知るためにそれぞれの時代・地域の専門の文献データベースを調査した。その結果を表1にまとめた。15世紀印刷本については英国図書館が構築する ISTC とベルリン国立図書館の GW、16世紀イタリアの印刷本についてはイタリア16世紀文献総合目録 EDIT16 (CNCE 番号)、ドイツ語圏については16世紀文献総合目録 VD16、フランスについては16世紀文献の総合目録がないために Bibliothèque Nationale de France の OPAC で調査した (FRBNF 番号)。また、ベルギー王立図書館の OPAC (VB 番号) と OCLC WorldCat も参照した。

表 1

地域	印刷都市	印刷年月日	印刷者	判型	典拠
Italy	Chivasso	1486/05/13	Jacobinus Suigus	4to	GW 1923 ; ISTC ia00713000
	Venice	1487/10/22	Georgius Arrivabenus	8vo	GW 1924 ; ISTC ia00714000
	Venice	1487/10/30	Nicolaus de Frankfordia	8vo	GW 1925 ; ISTC ia00715000
	Venice	1489/10/09	Georgius Arrivabenus	4to	GW 1928 ; ISTC ia00718000
	Venice	1492/06/04	Georgius Arrivabenus	4to	GW 1934 ; ISTC ia00723000
	Venice	1495/05/02	Georgius Arrivabenus	8vo	GW 1939 ; ISTC ia00726000
	Venice	149906/07	Paganinus de Paganinis	8vo	GW 1945 ; ISTC ia00729000
	Venice	1504/05/23	Georgius Arrivabenus	8vo	CNCE 1830
	Venice	1511/03/08	Alexander de Paganinis	8vo	CNCE 1831
	Venice	1525/01/23	In edibus Bernardini Stagnini de Tridino Montisferrati	8vo	CNCE 1832
	Venice	1569	Apud Iacobum Sansouinum Venetum	4to	CNCE 1833
	Venice	1576-78	Officina Stellae Iordani Zileti ; excudebat Aegidius Regazola	4to, 2 v.	CNCE 1837
	Venice	1576-78	In aedibus Aegidij Regazo- lae ; excudebat Aegidius Regazola	4to, 2 v.	CNCE 1839
	Venice	1576-78	Ex officina haeredum Melchioris Sessae; excude- bat Aegidius Regazola	4to, 2 v.	CNCE 1836
	Venice	1576-78	Apud Ioannem Variscum, & socios; excudebat Aegidius Regazzola	4to, 2 v.	CNCE 1835
	Venice	1576-78	Ad candentis Salamandrae insigne; excudebat Aegidius Regazzola	4to, 2 v.	CNCE 1834
	Venice	1576-78	Al segni della Fontana; excudebat Aegidius Regazola	4to, 2 v.	CNCE 1838

地域	印刷都市	印刷年月日	印刷者	判型	典拠
	Venice	1582	Apud Fabium & Augustinum Zoppinos fratres	4to, 2 v.	CNCE 1840
	Venice	1594	Alla Libreria della Speranza	?	OCLC 18487810
Germany	Speyer	1488	Peter Drach	folio	GW 1926 ; ISTC ia00716000
	Nuremberg	1488/08/28	Anton Koberger	folio	GW 1927 ; ISTC ia00717000
	Strassburg	1489/10/31	Martin Flach	4to	GW 1929 ; ISTC ia00719000
	Strassburg	1491/12/01	Martin Flach	folio	GW 1932 ; ISTC ia00721000
	Nuremberg	1492/02/10	Anton Koberger	folio	GW 1933 ; ISTC ia00722000
	Strasburg	1495/03/26	Martin Flach	folio	GW 1938 ; ISTC ia00725000
	Strassburg	1498/03/15	Martin Flach	4to	GW 1943 ; ISTC ia00727000
	Nuremberg	1498/08/23	Anton Koberger	folio	GW 1944 ; ISTC ia00728000
	Cologne	ca.1500	Cornelis de Zierikzee	4to	ISTC ia00729700
	Strassburg	1502	Martin Flach	?	VD16-A2821
	Hagenau	1505	Heinrich Gran & Johann Rynmann	?	VD16-A2822
	Hagenau	1509	Heinrich Gran & Johann Rynmann	folio	VD16-A2823
	Strassburg	1513	Johann Rynmann & Johann Knobloch	?	VD16-A2824
	Strassburg	1515/06/20	Johann Knobloch	folio	FRBNF30020853
	Strassburg	1515	Johann Knobloch	?	VD16-ZV607
	Strassburg	1520	Johann Knobloch	?	VD16-A2826
France	Lyons	ca. 1490	Jean Du Pré	4to	GW 1930 ; ISTC ia00719500
	Lyons	1492/11/16	Jean Du Pré	4to	GW 1935 ; ISTC ia00723500
	Lyons	1494	Antonius Lambillon	4to	GW 1936 ; ISTC ia00724000
	Rouen	1495/01/30	Jean Le Bourgeois	4to	GW 1937 ; ISTC ia00724500

地域	印刷都市	印刷年月日	印刷者	判型	典拠
	Lyons	1495/09/06	Johannes Trechsel	8vo	GW 1940 ; ISTC ia00726200
	Lyons	1496/07/15	Michel Topié	4to	GW 1941 ; ISTC ia00726400
	Lyons	1497/98/ 02/16	?	4to	GW 1942 ; ISTC ia00726500
	Lyons	1500/09/19	for Lucantonio Giunta?	4to	GW 1946 ; ISTC ia00729500
	?	after 1500	?	4to	ISTC ia00730000
	Paris	1502/11/18	Francisco Renaldo	8vo	FRBNF30020847
	Lyons	1505	S. Gueynard	4to	FRBNF31722304
	Lyons	1505	J. Poulet	?	OCLC 63261282
	Paris	1506/12/23	Philipp Pigouchet	8vo	FRBNF30020848
	Lyons	1509	Per Thomam de Campanis	?	OCLC 636109756
	Rouen	1511/03/02	Officina Petri Regnault	4to	FRBNF3122302
	Lyons	1512/09/04	Johannes Moylin	4to	FRBNF30020851
	Lyons	1513/08/19	Jacobus Marescal	4to	FRBNF30020852
	Lyons	1516/03/15	Jacobus Myt	4to	FRBNF30020854
	Lyons	1517	ab J. Huguetano, impressa per J. Myt	8vo	OCLC 717112213
	Caen	1517/12/07	Laurentius Hosingue	4to	FRBNF31722305
	Paris	1519/01/14	J. Frellon ; impressa per Johannem Prevel	8vo	FRBNF30020855
	Lyons	1519/11/09	impressa per Johannem Moylin alias de Cambray	4to	FRBNF30020856
	Lyons	1521	Antone du Ry	4to	FRBNF39305849
	Lyons	1523	Johannes Huguetus	4to	VB 1.702 A RP
	Lyons	1529	Jde Cambray	?	OCLC 83857675
	Lyons	1534/10/07	Jacobus Giunta	8vo	FRBNF34891381
	Lyons	1534	Jacobus Giunta	8vo	FRBNF35668954
Low Countries	Alost	1490/07/04	Thierry Martens	folio	GW 1931 ; ISTC ia00720000
Spain	?	1541	?	8vo	OCLC 630327586

表1で示すように『アンゲルスの大全』は15－16世紀にイタリアで19版、ドイツで16版、フランスで27版、低地地方とスペインで各1版が刊行された。

これらの印刷には注目すべき傾向が見られる。1486年に初版が印行されるとその後はヴェネツィア、ニュルンベルク、シュトラスブルク、リヨンなどでほぼ毎年のように版が重ねられた。判型は二折、四折、八折判と様々であるが、イタリアでは四折から八折の小型本の傾向があり、ドイツでは二折判の大型本として作られ、フランスではその中間の四折判が多い。印刷の中心はヴェネツィア、リヨン、シュトラスブルクであり、ヴェネツィアでは1487年から1594年までに18版（そのうちアッリヴァーネが5版）、リヨンでは1490年頃から1534年までに20版、シュトラスブルクでは1489年から1520年までに9版（そのうちマルチン・フラッハ（Flach, Martin）が5版）が刊行された。また、1495年だけでルーアン、シュトラスブルク、ヴェネツィア、リヨンから各1版ずつ刊行されるほど本書の出版は盛んであった。1520年までにケルン、アロスト、ハーゲナウ、パリ、ルーアン、カーエンなどでも刊行され、本書がますます広く普及した。しかし、1520年以降プロテスタント圏では刊行されなくなった。その理由の一つとして、マルチン・ルター（Luther, Martin, 1483-1546）が修道士時代に熟読していた本書をローマの権威の典型とみなしてレオ10世が発したルターに対する破門脅迫大教書、教会法典、ガブリエル・ビール（Biel, Gabriel, ca.1420/25-95）のミサ典文解釈書とともに1520年12月10日にヴィッテンベルクのエルスター門前で焼却したことが挙げられよう⁽⁹⁾。つまり、本書がプロテスタント教義とは相いれないものとなったからである。それ以降本書はカトリック圏のとりわけヴェネツィアとリヨンで刊行が続けられ、16世紀においても本書はカトリック圏では一定の役割を担っていたと判断できよう。

3. コンラート・ゲスナーへの影響

16世紀スイス・チューリヒの博物学者コンラート・ゲスナー（Gessner, Conrad, 1516-65）が編纂したギリシア語、ヘブライ語、ラテン語書の文献

情報データベースともいえる『万有書誌 (*Bibliotheca Vniuersalis*)』(1545年刊)の情報源の一つとして本文中で『アンゲルスの大全』が時折言及されている。ゲスナーは本書の43葉裏(h1^v)でアンゲルスの略伝と著作についてトリテミウス(Trithemius, Johannes, 1462-1516)の『聖職者の著作について (*De scriptoribus ecclesiasticis*)』に基づいて説明している(図3)。そして、ゲスナーは次のように注記している。

*Angelus de Claussio ... conscripsit Summam Angelicam, quod opus Venetijs impressum est, anno 1490. in 8. chartis circiter 67. In fine adiuncti utriusque iuris rubricae, charta 1. & dimid. & nuper Lugduni apud Theob. Pag.

アンゲルス・デ・クラウシオは(中略)『アンゲルスの大全』を書き上げた。その作品はヴェネツィアで1490年に約67折丁の八折判で印刷された。近年リヨンのTheob. Pag.においては末尾に両方の法律題目が1折丁と半分によって追加されている。

しかしながら、表1で示したように1490年ヴェネツィアの八折判はこれまで知られていない。ゲスナーの刊行年の記述は必ずしも正確ではないことを考慮すれば⁽¹¹⁾、1490年頃のヴェネツィアの八折判とは1487年あるいは1495年版が有力である。ところが、折丁数が67に近い版は見当たらない。その点で1495年ヴェネツィア版が折丁数が46で中でも多い方である。また、リヨンの1495年のトレクセル版も八折判で、折丁数がさらに多くて56あるが、ゲスナーが印刷地まで間違えていたとは考えにくい。実際、近年刊行されたゲスナーの旧蔵書目録には1495年ヴェネツィア版が登録されており、「ゲスナーはグロスミュンスターの神学校図書館でこの巻を利用した。6葉裏から7葉表の索引に彼の注記あり」と記述されており⁽¹²⁾、ゲスナーがこの版を利用したことが明らかであるため、『万有書誌』で言及されたヴェネツィア版は1495年版とみなすことができよう。つまり、早稲田大学図書

A N G E L

bo libellis. Prius autem Venetijs exiuerant, 1506. in 4.
 W. 4. 1494. ANGELVS de Clauasio, natione Italus, ordinis fratrum minorum sancti Francisci, fertur quædam præclara cudisse opuscula, quibus nomen suum longe lateq; diuulgauit: quibus extat notabilis summa de casibus simplicibus confessoribus, doctis nihilominus occupatis ualde utilis & necessaria, ubiq; iam dispersa, quæ ex nomine authoris prænotatur,
 Summa Angelica, lib. 1. Angelici spiritus & si.
 Additiones in eandem, lib. 1. Et quædam alia.
 * Angelus de Clauasio ordinis minorum, uicarius generalis Cismontanorum fratrum obseruantie, conscripsit Summam Anglicam, quod opus Venetijs impressum est, anno 1490. in 8. chartis circiter 67. In fine adijciuntur utriusq; iuris rubrica, charta 1. & dimid. & nuper Lugduni apud Theob. Pag.
 Verba authoris in prologo.

» Conspiciens etiam multitudinem summarum de casibus conscientialibus nõ
 » bene satisfacere pauperibus confessoribus & simplicibus propter prolixitatẽ aliã
 » quartũ, & aliarũ nimiam breuitatẽ, decreuit hanc Summã cõpendiosã ordinare,
 » quã et Anglicã nominabo, in qua mediocritate seruata, etc. hanc quicq; perlege
 » rit, inueniet quicquid in alijs Summulis continetur, quod pertineat ad cõfessores,
 » præsertim in Summa dicta Pisanelia, ac eius supplemento, cuius casus cõscientiales
 » hic cõs inserui, licet aliquando p alia uerba, aut alio ordine. Et ultra prædicta repe
 » riet in c. quod incipit, interrogationes quacũq; pertinet ad confessorẽ uel cõfiteri
 » uolentẽ circa quacũq; peccata mortalia cognoscẽda: Dirigetur etiã ad multa con
 » silia danda, ac ad inueniendũ doctores & iura, ubi de talibus diffuse tractat. Ita q
 » hic liber erit utilis, nõ solũ cõfessoribus, uerũ etiã scholaribus utriusq; iuris, & alijs
 » quibuscũq; secundũ Deũ & rectã ciuilitatem uiuere cupientibus. Et paulo infẽ
 » rius: Ordo libri per literas alphabeti distinguitur, & qualibet litera per capitula di
 » uersa: quodlibet uero capitulum suos habet paragraphos, exceptis quatuor, &c.
 » Scriptores in theologia, Sumistas, et in utroq; iure passim citat, circiter CLXX.
 » eorumq; testimonijs sua confirmat. Sed enumeremus locos primæ alphabeti li
 » teræ, ut inde coniectura de reliquis quoq; fiat.

Abbas,	Abbatissa,	Aborũ	Abrogatio,
Abfens,	Abfolutio,	Acceptio,	Acedia,
Actiões,	Acolyti,	Actus,	Accusatio,
Adiuratio,	Administratio,	Admonitio,	Adoptio,
Adoratio,	Adulatio,	Adulterium,	Aduocatus,
Affinitas,	Agnati,	Alchimia,	Alea,
Alienatio,	Alimenta,	Altare,	Alternatiua,
Ambitio,	Amicitia,	Amor sui,	Amor sæculi,
Angaria,	Appellatio,	Apostasia,	Aqua benedicta,
Arbiter,	Archidiaconus,	Archiepiscopus,	Archipresbyter,
Argumentatio,	Arra,	Arrogatio,	Ars,
Ascinus,	Astrologia,	Astutia,	Auaritia,
Audacia,	Augere,	Augurium,	Austeritas,

ANGELVS Cofpus Bononiensis, homo in literis tum Græcis, tum Latinis apprime eruditus (cui Vienna, cum hominem exuisset, nos in bonarum literarum publica professione successimus) uertit Diodori Siculi libros decimum sextum & 17, Ioa chimus Vadianus in suis commentarijs in Melam.

ANGELI Decembrij Mediolanensis oratoris ad Pium II. Pont. Max. Politicæ literariz libri 7. multijuga eruditione referũ, ante annos 80. plus minus scripti, & Roma in bibliotheca Pontificis reconditi: clade uero Romana Carolo Borbonio, & Georgio Fronspergio ducibus, anno 1527. eruti, & in lucem æditi Augustæ Vin. delicorum,

図3. コンラート・ゲスナー『万有書誌』第1巻43葉裏(h1^v)のANGELUS de Clauasioの項目(早稲田大学図書館所蔵 F026-36)

館に収蔵された版と同じ版をゲスナーも利用していたことになる。一方、16世紀のリヨンの Theob. Pag. 版というのは上記に示すようにこれまで知られていない。16世紀最後のリヨン版は1534年のジュンタ版である。その巻末に法律題目の付録があることをあえて言及していることを考慮すると、ゲスナーが見たヴェネツィア版ではそれが巻末に綴じ込まれておらず、図書館所蔵本と同様に本文の直前に製本されていたのかもしれない。

続いて、ゲスナーは著者の序文 (Verba authoris in prologo) を途中省略しながらヴェネツィア1495年版を基にして16行分引用している。それは上述の『ピーサの大全』に基づいて本書を編纂したという件の前後を抜き出して、本書の成立について説明しようとした。ゲスナーによる引用文に見られる縮約語 (contractions) はヴェネツィア1495年版と比較して少ないことを考慮すれば、ゲスナーは縮約語を自由に入れ変えて序文を記述していることになろう。

さらに、本書には神学と法学の両方の著者約170名の名前が挙げられていることを指摘している⁽¹³⁾。それは、『アンゲルスの大全』の序文に続いて掲載された神学者・法学者の一覧である。そこにはアルファベット順でそれぞれ ¶In sacra scriptura seu theologia (聖なる書物あるいは神学において)、¶In iure Canonico uel Civili (教会法あるいは市民法において)、¶Summiste (頂点) に分けて神学者・法学者が列挙されている。ヴェネツィア1495年版で数えると実際には176名であり、ゲスナーの記述は比較的正確である。

実際これらの著者のうちゲスナーが本文中で『アンゲルスの大全』を典拠に取り上げた著者は46人ほどである。『アンゲルスの大全』で示された名前の順番通りにゲスナーの記述を表2に示す。なお、ゲスナーは書誌の典拠として欄外にトリテミウス (Trithemius, Johannes, 1462-1516) 『聖職にある著者たちの目録 (De scriptoribus ecclesiastici)』(バーゼル、1494年刊)の該当箇所を示すための略語を記載しているので、表2ではそれらに記載があるものについては [] に入れて冒頭に示した。また、ゲスナー

の書誌の該当箇所を各末尾に（ ）で示した。

表 2

	『アンゲルスの大全』での記述	『万有書誌』での記述（該当箇所）
1	Dominic<us> d<e> sa<n>cto georgio canonista	DOMINICVS de S. Georgio Canonistam Angelus author Summae Angelicae al- legat. (214 ^v)
2	Gulielus d<e> mara rdnis minory<m>	GVLIELMVS de Mara ordinis minoru<m> citat<ur> inSumma Angelica inter theologos. (291 ^v)
3	Guido ep<iscopu>s co<n>cordiensis	GVIDO Concordiensis episcopus citatur in Summa Angelica inter Canonici uel Ci uilis iuris scriptores. (286 ^v)
4	Gulielmus de nason	GVILELMVS Naso citatur in Summa Angelica inter Canonici aut Ciuilis iuris scriptores. (291 ^v)
5	Gualdensis	GVALDENSIS quidam citatur in Summa Angelica inter iuris Canonici aut Ciui- lis scriptores. (284 ^v)
6	Gualteri<us> ep<iscopu>s pictaiuiensis ordismi.	GVALTERIVS episcopus Pictaiuen<sis>. ordinis minorum, citatur inter Summistas in Summa Angelica. (284 ^v)
7	Hermanus magnus legista	HERMANNVS magnus Legista, citatur in Summa Angelica. (315 ^v)
8	Hugo v<er>celensis.	HVGO Vercellen<sis>. citatur in Summa Angelica inter scriptores in iure canonici uel ciuili: & ibidem nescio quis HVGO nominatur, qui multas glossas scripserit in Decretum. (340 ^v)
9	Hugolinus de la fontana glosator iuris ciuilis.	HVGOLINVS de la Fontana glossator iurisciuilis: ut repro in Summa Angelica. Io. Fichardus, Hugolinum quendam in uitis iureconsultorum commemorat cum Bulgaro, & alijs, quorum nulla omnino (inquit) monu- menta extant. (341 ^v)
10	Ioa<n>nes d<e> noto ordinis minor<um> siculus	IOANNES de Noto ordinis Minorum Siculus, theologiae scriptor, citatur in Sum- ma Amgelica. (442 ^r)
11	Ioa<n>nes d<e> neapoli ordinis p<rae>dicator<um>	IOANNES de Neapoli ordinis Praedicatorum, theologiae scriptor, citatur in Summa Angelica. (442r)
12	Ioannes de ripolis.	IOANNES de Ripolis, theologiae scriptor, citatur in Summa Amgelica.(450 ^v)
13	Iacobus lotharius.	IACOBVS Lotharius in Summa Angelica citatur inter scriptores iuris canonici uel ciuilis. (358 ^v)
14	Iacobus de rauena	[T. cl. 1300] IACOBVS de Rauenna prouincia Lotharin- giae oriundus, scripsit in utroq<ue> iure mul ta opuscula, è quibus seruntur, (3 lines) *Citatur in Summa Amgelica. (5 lines). (361r-v)

	『アンゲルスの大全』での記述	『万有書誌』での記述（該当箇所）
15	Ioa<n>nes thetonicus glosator d<e>creti	[T. cl. 1350] IOANNES nomine & natione Teuthonicus, ex ciuitate Fributgensi oriundus, epi- scopus Bossinen- sis in Humgaria, ordinis Praedicatorum, scripsit notabilem (1 line) Et quaeda<m> *Ioan. Teuthonicus glossator Decreti, citat<ur> in Sum<m>a Angelica. (457v-458r)
16	Ioa<n>nes fauentinus.	IOAN. Faue<n>tinus inter canonici uel ciuilis scrip- tores in Sum<m>a Angelica citatur. (415 ^v)
17	Ioa<n>nes de faucona	IOAN. de Faucona inter canonici uel ciuilis iuris scrptores in Sum<m>a Angel. citatur. (415 ^v)
18	Ioa<n>nes de deo hispanus	[T] IOANNES de Deo, iuris utriusq<ue> professor, scripsit uaria in utroq<ue> iure opusculae, è (7 lines). *Io. de Deo, natione Hispanus, inter canonici iuris scriptores citatur in Sum- ma Angelica. (411 ^v)
19	Ioa<n>nes monachus cardina- lis.	IOANNES monachus scripst super sexto Decretalium : & habentur Annotationes eius cum ipso Textu impressae. Ioan. Monachus Cardinalis citatur in Summa Angelica. (438 ^v)
20	Ioannes de anania	IOANNES de Anania Bononiensis, ibidem in patia Archidiaconus & Canonici (3 lines) ... Ioan. Fichar- dus. Inuenio seorsim citatas eius Glossas su- per quinto Decretal. Hunc puto simpliciter etiam Archidi- aconi nomine citari : allegatur in Summa Angelica. Extat Archidiaconi Lectura super Decreto. (382 ^v)
21	Ioa<n>nes plagiarius de senis	IOAN. Plagiarius de Senis inter iuris ciuilis uel cano. Scriptores citatur in Summa Angelica. (448 ^v)
22	Ioannes de montermerlo	IOAN. Montermerlo inter canonici uel ciuilis iuris scriptores citatur in Summa Angelica. (439 ^v)
23	Ioannes d<e> sa<n>cto georgio bononie<n>sis	Ioannes de S. Georgio Bononie<n>sis, celebris iuris Canonici doctor, citatur in Sum ma Angelica. Vxorem habuit filia Ioannis And. Bononien<sis> qui claruit anno 1347. (420 ^v)
24	Ioa<n>nes d<e> platea bononie<n>sis	IOAN. de Platea Bononiensis, iuris peritus, citatur in Summa Angelica. Com- mentarij eius super Institut. impressi sunt Lugduni in fol. & Tridini, 1519. Item super tribus libris Codicis, Lugduni 1528. (448 ^v)
25	Ioa<n>nes antoni<us> d<e> sa<n>cto georgio nu<n>c ep<iscopu>s alexandrinus mediolanensis.	IOANNES Antonius de S. Georgio, episcopus Alexand- rinus, Mediolanen<sis>. citatur in Summa Angelica (nam eius authoris aetate uixit) inter scriptores Iuris Canoni- ci, aut Ciuilis: forte idem supra nominatur Antonius de S. Georgio, qui de Appel- latonibus scripsit. (383 ^v)

	『アンゲルスの大全』での記述	『万有書誌』での記述（該当箇所）
26	Iacob<us> de laude ordinis minoru<m>	IACOBVS de Laude, ordinis minoru<m>, in Sum<m>a Angelica numerat<ur> inter Summistas. (357r)
27	Ioannes de anco<n>a	IOANNES de Ancona, citatur inter Summistas in Summa Angel. (382 ^r)
28	Ioa<n>nes ordinis predicato<rum> qui fecit sum<m>a <con>fesso<rum>	Ioan. Praedicatorum ordnis monachus, scripsit Summam cofessorum, quae cita- tur in Summa Angelica. (449 ^r)
29	Landulphus ordinis mnor<um>.	LANDVLPHVS oridinis minorum scriptor theologiae, citatur in Summa Angrlica. (476 ^r)
30	Lappus d<e> castl<l>io<n>e abbas	[T. cl. 1340] LAPVS de Castellione, abbas S. Miniatiissul- tus, ordinis diui patris Benedicti, iureco<n>sultus (3 lines) *Citatur in Summa Angelica. 2 Allegatio<n>es eius impressae sunt in fol. & in 8. (4 lines) . (476 ^r)
31	Laurentius d<e> pinu	LAVRENTIVS de Pinu, citatur in Summa Angelica inter scriptores iuris cano. uel ciuilis. (477 ^r)
32	Laurentiu<s> d<e> redulphis florentinus.	LAVRENTIVS de Rodulphis Florentnus, citatur in Smma Angelica. Scripsit defensorium montis pietatis: alias, Disputationem de material montis pietatis: Inci- (2 lines) (477 ^r)
33	Lucas d<e> grasijs.	LVCAS de Grasijs citatur in Summa Angelica inter scriptores Iuris can, uel ciuilis. (483 ^r)
34	Nicholaus de Matarelis	[T cl. 1340] NICOLAVS de Maturellis Mutinensis, uir in utroq<ue> iure doctus, scripsit in ciuili iu- re quaedam praeclara uolumina, è quibus seruntur, (2 lines) Et quaedam alia. *Citatur in Summa Angelica. (522r)
35	Odoardus	ODOARDVS citatur in Summa Angelica inter scriptore iuris. Fortè idem est Ol- dradus, de quo infra. (526r)
36	Petrus aureoles ordinis minorus.	[T cl. 1317] PETRVS de Verberia, dictus Aureoli, ordinis fratrum Minoru<m>, & archiepiscopus (6 lines) Et alia quae non uidi. * Citatur in Summa angelica. (553 ^r)
37	Petr<us> d<e> palude ordi<ni>s p<rae>dicator<um>.	[T scripsit anno 1300] PETRVS de Palude, natione Gallus, ordinis fratrum Praedicatoru<m>, aedidit quaedam (4 lines) *Citatur in Summa Angelica. Co<m>mentarij eius super tertio & quarto Sen- tentiarum, impressi sunt Parisijs in fol. 1530. (551 ^r)
38	Petrus Helie	PETRVS Heliae scriptor iuris, citatur in Summa Angelca. (549 ^r)
39	Petrus de stagno.	PETRVS de Stagno scriptor iuris, citatur in Summa Angelica. (553 ^r)

	『アンゲルスの大全』での記述	『万有書誌』での記述（該当箇所）
40	Philipus	PHILIPPVS quida<m> iuris scriptor, alius à Philippo Perusino, citat<ur> in Sum<m>a Agelica. (555')
41	Richard<us> d<e> mediauilla ordi<ni>s minor<um>	[T cl. 1190] RICHARDVS de Mediauilla, natione Anglicus, ordinis fratrum Minorum, uir in di uinis scripturis, philosophia, & iure canonico egregie doctus. ... (6 lines) ... *Hic nus est ex qua- tuor expositoribus regulae nostrae. Angelus author Summae Angelicae. Aliquil (4 lines). (582')
42	Rogierius	[T cl. 1040] ROGERIVS monachus ordinis S. Benedicti, ad quem Guimundus Auersanus epi- scopus adhuc in coenobio constitutes, ... (2 lines) Et quaedam alia. *Rogerius quidam Summista allegatur in Sum<m>a Angelica. (586')
43	Stephaus prouincialis	[T cl. 1330] STEPHANVS de Prouincia, utriusq<ue> iuris professor & interpret eximius, scripsit (3 lines) *Citatur in Summa Angelica. (603')
44	Signorolus d<e> homedeis	SIGNOROLVS (aliquando additur cognomen de Homedeis, ut citatur in Summa Angelica: nescio an idem sit author) scripsit in Rubricas primi Digesti uet. de ado- ptionibus ... (8 lines). (598')
45	Tancredus doctor iuris canonici	TANCREDVS doctor iuris canoici citatur in Summa Angelica. Scripsit Compendiosam. (607')
46	Zenzelinus doctor iuris canonici	ZENZELINVS doctor iuris canonici, citatur in Summa Angelica. (651')

46人中トリテミウスを典拠としているのは14、15、18、30、34、36、37、41-43の10人であり、フィカルドゥス（Johannes Fichardus）の法律家の人名録を典拠としたものが9と20である。また、44についてはローマ法を構成する『旧学説彙纂（*Digesta vetus*）』が参照されている。そのため、それらには『アンゲルスの大全』に基づかない記述が豊富に見られる。その他の33人については『アンゲルスの大全』が唯一の典拠とされている。特に記述が短い、つまりゲスナーが十分な情報を持ち得なかった27人の著者（1-7、10-13、16、17、21、22、26-29、31、33、35、38-40、45、46）については本書を唯一の典拠としていることは確実である。しかしながら、『アンゲルスの大全』にはない記述を含む8、19、23-25、28、30、32についてはその他の情報源を利用していると考えられる。事実24ではリ

ヨン版などの印刷本の情報が記載されている。ところが、ゲスナーはなぜかA-Cの項目では『アンゲルスの大全』を全く参照していない。また、アンゲルスが取り上げていてもゲスナーが取り上げていない著者も実際には多数存在する。ゲスナーがどのような基準をもって著者を取捨選択したのかという問題については今回の調査では明らかにできなかった。

ゲスナーはチューリヒ生まれで、チューリヒで活躍した宗教改革者ツヴィングリ（Zwingli, Huldrych, 1484-1531）と直接面識があり、彼によって奨学金を認めてもらい、さらには父親がツヴィングリとともにプロテスタント信仰の自由を求めてカッペルの戦いで戦死したこともあり、ツヴィングリを深く敬愛してプロテスタント信仰を生涯貫いた学者である⁽¹⁴⁾。彼は1536年パリ遊学時代に反宗教改革の恐怖を味わい、シュトラスブルクへ逃避したこともあった⁽¹⁵⁾。その彼がスイスの宗教改革運動の中で、どのような情報源から文献・人物の情報を収集し、取捨選択して『万有書誌』に採録したのかというテーマはゲスナーを考える上で、そして16世紀の文献世界を知る上で大変重要な課題であろう。このような情報源の一つとして『アンゲルスの大全』が利用されたことには大きな意味があろう。すなわち、プロテスタント圏ではすでに利用されることはなく無用になっていたカトリックの権化ともいべき本書を敢えて利用して情報収集していたことは、彼の飽くなき学問研究の態度と、宗教改革の渦中にありながらカトリック側の書物にも通じるという寛容な精神性を示しているとみなすことができるのではないだろうか。

4. 終わりに

本稿では早稲田大学図書館の新収資料である『アンゲルスの良心問題大全』（ヴェネツィア、1495年刊）を解題して資料紹介しながら、本書の成立した事情と、本書が15-16世紀にどのように刊行されたかを各種のデータベースを調査して考察した。そして、ルターの宗教改革との関係で本書

がプロテスタント圏で刊行されなくなったことを指摘した。一方、プロテスタントの学者コンラート・ゲスナーはカトリックの権化である本書を図書館収蔵本と同じ1495年ヴェネツィア版に基づいて有効に利用して神学者と法学者の情報、とりわけ他には得がたいような情報を『万有書誌』に採録していたことを明らかにした。本書がゲスナーに影響を与えていたということができよう。

以上のように15－16世紀の書物には宗教改革と反宗教改革に巻き込まれたものが少なくなく、西洋書誌学、西洋書物史を研究する場合にそれを選んで論じるわけにはいかない。『アンゲルスの大全』はその点を我々に教えてくれる1冊であろう。

本稿の執筆には早稲田大学図書館資料管理課の皆様大変お世話になりました。末尾ながらここに記して感謝の意を表します。

注

文献データベースの略語は以下の通りである。

EDIT16 Istituto centrale per il catalogo unico. Censimento nazionale delle edizioni italiane del XVI secolo. URL: http://edit16.iccu.sbn.it/web_iccu/ihome.htm (参照 2011. 8. 26)

GW *Gesamtkatalog der Wiegendrucke*. Bd. 1- Stuttgart, etc., 1968- [in progress]. (Vols. 1-7 reproduced with additions and corrections from the original edition (Leipzig, etc., 1925-38)).

URL: <http://www.gesamtkatalogderwiegendrucke.de> (参照 2011. 8. 26)

ISTC British Library. Incunabula Short Title Catalogue.

URL: <http://www.bl.uk/catalogues/istc/index.html> (参照 2011. 8. 26)

OCLC WorldCat Online Computer Library Center WorldCat.

URL: <http://www.worldcat.org/> (参照 2011. 9. 7)

VD16 Bayerische Staatsbibliothek. Verzeichnis der im deutschen Sprachbereich erschienenen Drucke des 16. Jahrhunderts.

URL: <http://www.bsb-muenchen.de/16-Jahrhundert-VD-16.180.0.html> (参照 2011. 8. 26)

- (1) これまで早稲田大学図書館に収蔵された18点のインキュナブラについては Yukishima, K. *Incunabula in Japanese libraries* (IJL2). Tokyo: Yushodo Press, 2004, no. 011, 030, 075, 097, 103, 140, 149, 153, 162, 206, 236, 252, 266, 306, 330, 334, 367, 383参照。
- (2) アンゲルス・デ・クラワシオの伝記についてはあまり詳しい記述が得られなかった。そのため本稿では Pezzela, S. 'CARLETTI, Angelo'. *Dizionario biografico degli italiani*, t. 20. Roma: Istituto della Enciclopedia italiana, 1977, pp. 136-138 と Bellone, E. 'Note su Angelo da Chivasso (1410c.-1495) e sulle fonti classiche, patristiche e bibliche della sua «Somma» per confessori', *Studi francescani*, 82, 1985, pp. 147-163を参照した。アンゲルスが亡くなった場所については Pezzela はウディネとしたが、Bellone はそれを否定してクーネオとしている。
- (3) Bellone, E., op. cit., pp. 148-149. ところが、15世紀の同時代人であるトリテミウス (Trithemius, Johannes, 1462-1516) はアンゲルスの著作として Summa angelica: li. i. Angelici spiritus & si. | Additiones in eandem, li. i. の3書をあげている。最後の書は『アンゲルスの大全』の補遺と思われる (Trithemius, Johannes. *De scriptoribus ecclesiasticis*. Basel : Johann Amerbach, 1494, fol. 129^v)。
- (4) Cf.: *La piccola treccani : dizionario enciclopedico*, t. 1. Roma: Istituto della Enciclopedia italiana, 1995, p. 793.
- (5) Cf.: *Grande dizionario enciclopedico UTET*, t. 3. Torino: UTET, 1985, p. 10.
- (6) 1495年ヴェネツィア版での記述は、 π^2 , q<u>d pertineat ad co<n>fessores. p<rae>sertim in su<m>ma dicta pisanela ac | eius supplemento cuius casus co<n>scie<n>tiales hic o<mn>es inserui. licet aliq<ua>n<do> p<er> alia u<er> | ba aut alio ordine.
- (7) Ministero della Pubblica Istruzione (ed.). *Per la storia del libro in Italia nei secoli XV e XVI: notizie raccolte*. Firenze: Leo S. Olschki, 1900, pp. 33-34.
- (8) 雪嶋宏一、「パチョーリとパガニーニ」、片岡泰彦編『我が国パチョーリ簿記論の軌跡』下巻、雄松堂書店、1998. 6、p. 550.
- (9) Pastorello, E. *Tipografi, editori, librai a Venezia nel secolo XVI*. Firenze: Leo S. Olschki, 1924, pp. 34.
- (10) T. カウフマン著、『ルター：異端から改革者へ』（宮谷尚美訳）、教文館、2010、pp. 49, 74.
- (11) 例えば、ゲスナーは序文でヨハネス・フィカルドゥス (Fichardus, Johannes) 『教会法と市民法における昔の法律家から我々の時代に至るまでの最近の法律家すべての著書たちの2つの索引』という書物の1535年版を利用したと述べているが、実際にはこれは1536年版でなければならない (雪嶋宏一「コンラー

ド・ゲスナー『万有書誌』の書誌的源泉』、『学術研究—教育学・生涯教育学・初等教育学編—』、第59号、2011. 2、p. 57参照)。

- (12) Leu, U. B., R. Keller, S. Weidmann. *Conrad Gessner's private library*. Leiden: Brill, 2008, p. 49.
- (13) 43^v line 28: Scriptores in theologia, Sum<m>istas, et in utroq<ue> iure passim citat, circiter CLXX. Eorumq<ue> testimonijs sua confirmat.
- (14) ハンス・フィッシャー著、『コンラート・ゲスナー：生涯と著作』（今泉みね子訳）、博品社、1994、pp. 11-13.
- (15) Serrai, A. *Conrad Gesner*. Roma: Bulzoni Editore, 1990, p. 14.

(ゆきしま こういち 教育・総合科学学術院准教授)

薩摩治郎八（1901－1976）は、綿織物業で財を成した豪商薩摩商店の三代目として東京駿河台に生れた。早くに渡欧し、パリを拠点として戦前のフランス社交界で華々しく活躍。ラヴェルや藤田嗣治といった現地で創作活動をする多くの文化人に私財を投じ支援し、今日も残るパリ大学都市日本館を創設する等、日仏文化交流の発展に努めた人物である。また自身も詩歌や小説、その豊かな経験を題材とした随筆を残している。

この度薩摩治郎八の関連資料が令閨利子氏の御厚意により早稲田大学図書館へ寄贈された。彼のたずさわった国内外での活動・業績を伝える資料をはじめ、直筆原稿、書簡、遺愛の品や写真等、多彩な内容である。これらには第二次世界大戦前後の日欧交流の問題を考えるうえできわめて重要な資料が多く含まれている。また近年彼に関する著作が刊行され注目を集めているが、激動の時代を生きた薩摩治郎八の人生、人となりを知り得るまたとない資料といえる。

なお、今回の寄贈を記念し、展覧会「バロン・サツマが来たァ！」を開催する。多くの皆様にご観覧いただければ幸いである。

〈薩摩治郎八関連資料受贈記念展示〉

バロン・サツマが来たァ！

会期：2012年3月23日（金）～2012年5月24日（木）

会場：早稲田大学総合学術センター2階展示室

時間：10：00～18：00

日曜・祝日は閉室

但し3月25日（日）・4月1日（日）は開室
（～17：00）

5月1日（火）・2日（水）は閉室

問合先：早稲田大学図書館 TEL：03－3203－5581

